

セクシュアルマイノリティと貧困について

－ 研究序説として －

早稲田大学 志田哲之

1. 目的

本報告の目的は、これまでセクシュアルマイノリティと貧困がどのように論じられてきたかを概観し、今日的な問題を検討・考察することにある。

「LGBT」の言葉のもとに、国内外を問わずさまざまな活動が展開され、社会からの注目を集めるにつれ、これらへの批判もまた同時にさまざまに展開されている。いくつかある批判の中でも、徐々に声が高まってきているのは、新自由主義的な動きとの結びつきとそこから置き去りにされる人々の存在である。とりわけ近年では、国内でも貧困への言及が散見されるようになり、セクシュアルマイノリティもまた格差社会と無縁ではないようにも見える。

2. 方法

主に就業や経済について言及している文献を確認しながら、これを検討し、考察を行なう。

3. 結果

D'Emilio, J.やRubin, G.が示したように、アメリカにおいては、資本主義の発達とセクシュアルマイノリティの出現は密接に結びついている。また当事者の大都市への居住指向は高く、一方で大都市での社会的・経済的地位の低さが指摘されていた。

日本においても1970年代の都市病理学の論文から同様の動向がうかがわれ、セクシュアルマイノリティとして生を営もうとする人々の生活は豊かではなかったと推測される。1990年代に矢島正見らによって行われたインタビュー調査からは、進学や就業の検討の際に自らのセクシュアリティ問題として関与し、不安定な状況にある当事者の姿も見られる。さらに1999年には、河口和也が新宿二丁目の路上に立ち売春をして生計を立てている（男性）同性愛の若年層への生活史（ライフヒストリー）の聞き取り調査による論文が発表されていることなどから、セクシュアルマイノリティにおいて、貧困は継続的な問題として捕捉可能であり、研究の俎上に上げられる機会は多くなかったが、決して目新しいテーマではないともいえる。

そしてこれらの研究から共通して見出されることのひとつには、異性愛規範に基づく家族等の共同体的な集団からの離脱によって直面する相互扶助的な関係の希薄化と、ひとりで生きていくことの脆弱さが指摘できる。

4. 結論

以上から、社会的・経済的地位の低さや貧困は、今世紀に入って言及される機会が減少したものの、古典的ともいえる問題だと考えられる。

今日、グローバル企業を始めとした大企業からの「LGBT」市場への注目や、そこで働く人々の就業条件の改善が示されるものの、だれもがそこに参与できるわけではなく、これらとは隔絶された生活を送る人々もいる。ただ、グローバル化が進展する中で、格差や貧困の拡大が叫ばれ、性的指向性や性自認が主たる貧困の条件となりうるかといった疑問もある。今日見られるセクシュアルマイノリティにおける貧困とは、特有の条件が関与して生じるものなのだろうか、仮にそうでしたら、それは今日いかなるものなのか。上述から、異性愛規範に基づく家族等からの支援の欠如が仮説として立てられるが、コミュニティ言説や同性パートナーシップはこの代替的な関係であるのだろうか。これらの問いを続く研究への出発点として設定することで報告を終えたい。